

ードヴォルザーク生誕150年記念コンサート・ライブ

モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

交響曲第38番 ニ長調 K.504 《プラハ》

Symphony No.38 in D Major, K.504 "Prague"

- | | |
|------------------------|--------|
| ① I - Adagio - Allegro | 12'52" |
| ② II - Andante | 8'34" |
| ③ III - Presto | 5'48" |

ドヴォルザーク Antonín Dvořák (1841-1904)

交響曲第9番 ホ短調 作品95 B.178 《新世界より》

Symphony No.9 in E Minor, Op.95 B.178 "From the New World"

- | | |
|------------------------------|--------|
| ④ I - Adagio - Allegro molto | 9'27" |
| ⑤ II - Largo | 12'27" |
| ⑥ III - Molto vivace | 7'53" |
| ⑦ IV - Allegro con fuoco | 12'26" |

ラファエル・クーベリック指揮

Rafael Kubelík conducting

チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

Czech Philharmonic Orchestra

録音：1991年10月11日 プラハ、スメタナ・ホール(ライヴ)

Recording Director: Zdeněk Zahradník

Recording Engineer: Jan Kotzmann

©1991 BVA International

日本コロムビア所有のオリジナル・マスターより2023年にORTマスタリングを行いSACD化

〈Staff〉

Product Selection and Supervision: Susumu Kitamura (Tower Records Japan, Inc.)

Product Manager: Nobuo Nakazato (Nippon Columbia Co., Ltd.)

Mastering Engineer: Atsushi Mohri (Nippon Columbia Co., Ltd.)

Artwork Designer: Teruhisa Abe (Canaria Design)

Booklet Editor: Asao Tsuji (Nippon Columbia Co., Ltd.)

今回の制作に関しまして

～「ORTマスタリング」を採用したSACDハイブリッド化企画、本格開始～

これまでタワーレコードによるSACD企画は、アナログで収録されたアナログマスターテープを使用して最新でハイレゾ化を行ったマスターを元に復刻してきました。例え過去にSACD化されたことがある音源でも、マスタリング含む工程を最新で行うことにより、従来を超える音質や鮮度を獲得してきたことはご存知の通りです。

しかしながら、1970年代後半から徐々にスタンダードとなったデジタル録音時期、特に巨匠と呼ばれた指揮者や演奏者がまだ多く存在していた最盛期にも多くの名盤が存在します。特に晩年の最高のパフォーマンス時期に収録された盤が、ちょうどデジタル録音の最初期に当たっていたというケースが多いことに（音質的に）愕然とする方も多いのではないのでしょうか。録音史的には最盛期とも言えるこの時期の録音スペックは、現在では物足りない（捉えきれない）のではという指摘があることは確かです。その時期の音源を再生するにはCDスペックが相応しい、もしくは十分であると考え方も少なくありません。

一方、ハイスペックで聴くことができないその“失われた時代”の音質を何とかして向上できないか、という試みもこれまでマスタリングや物理的なプレス過程等では多く行われてきました。しかし、元々収録されたスペックや録音状態からアナログ音源を最新で復刻した時と比較すると、アナログ録音の最新復刻のような劇的な改善とまでは至らないと言えます。

そのような中、2015年に主に配信用として日本コロムビアさんが“画期的なハイレゾ・アップコンバート技術”の実用化を行っていたことがわかりました。CDへの応用はほぼない状況でしたが、2020年の当社の企画盤でスプラフォン原盤のノイマン/マーラー：交響曲全集（TWSA-1070～9）をSACDで復刻するにあたり、どうしても3曲あるデジタル録音も入れた全集にするべく、テストケースとして「ORTマスタリング」を採用しました。その結果は良好

で検証も行った結果、元の録音状態にももちろん左右されるものの、概ねハイレゾに耐えうる可能性があることを確認できました。その後、この技術を使った新規企画の音源を模索し、さらなる検証とテストを行った結果、正式に「ORTマスタリング」を採用したSACDハイブリッド化企画をスタートすることにしました。

この技術的内容に関しては他のページに後述してありますが、効果は予想以上でした。「ORTマスタリング」を行ったデジタル初期音源は、個々の音質差以上に音場間の向上や音離れが良くなり、解像度が高まりました。また、ステージが従来より近く感じられ緊密感も増しています。SACD層に限らずCD層でも「ORTマスタリング」を反映させていますので、その効果を確認できると思います。程度は元の録音状態によることや、最も成功したアナログ録音の最新復刻時のような劇的な変化とまでは言えないものの、従来の復刻に勝るとも劣らない音質を獲得できることを確信し、本格的に企画を進行して行くことにした次第です。

これにより初期デジタル録音をより良い音でお届けできることになりました。“失われた時代”の名盤を失われた音楽に決してさせない、むしろ音楽的に恵まれた時代の音源を積極的に復刻するひとつの重要な方法として今後も様々なチャレンジを図りつつ、豊かな時代の素晴らしい音源をリスナーの元へお届けして行く所存です。

北村 晋 (Tower Records Japan, Inc.)

新鮮でエネルギーに満ちたクーベリックの音楽
——クーベリック／チェコ・フィル ドヴォルザーク生誕150年記念コンサートよせて

特別取材 岸 浩

「ブラハで、またクーベリックがチェコ・フィルを指揮する」という話に、今回はなぜか足が軽くブラハに向いてしまった。チェコスロヴァキア大使館へ行ってビザをもらい、航空券を予約してやっと機上の人となった。今や私の住むケルンからブラハへ毎日直行便が出ている。二年前だったらビザを手にするまで一週間近く、発行されるのか、されないのかと苛立って待たなければならなかった。報道関係というだけで拒否されることもあった。飛行機だって乗り継ぎだったから、この変わりようはどうしたところか。

私のブラハは、69年の『ブラハの春』以来、ほぼ22年半ぶりになる。当時は、前年の『ブラハの春』事件以来つづく改革派に対する締めつけが強められていたが、まだ市民はどこかのびのびとしていた。スヴォボダ大統領、ドブチェク首相がまだ在任していたが、もう無力の末期だった。

チェコスロヴァキアはそれから20年、暗黒時代を繰り返していた。改革派は弾圧され、体制を批判するものは容赦なしに捕らえられ拘留されていた。

そんな時代に、外から改革派を精神的に支援していた一人がクーベリックだった。チェコスロヴァキア政府に直接抗議の書簡を送ったり、ソ連のブレジネフ最高会議幹部会議長に、拘留

されている体制批判家を釈放するようチェコスロヴァキア政府に働きかけるよう書簡を送ったり、そしてこれに反応がないと公開書簡として発表したりと……。

クーベリックというと、音楽家としての活動と並行して、このような人権擁護面でのエネルギーギッシュな活動をおもいだす。クーベリックが何回もチェコスロヴァキア政府に釈放を迫っていた人にヴァツラフ・ハーヴェルという作家がいた。この人は新生チェコスロヴァキアの初代大統領に選ばれている。

クーベリックは『ブラハの春』の創始メンバーの一人だ。48年に当時の体制を批判してチェコ・フィル主席指揮者のポストを捨て西側世界に出、以来去年の『ブラハの春』まで一度も祖国に足を踏み入れなかった。硬骨の人である。

クーベリックは、86年の5月末にミュンヘンでマーラーの《第九》を指揮したあと、指揮活動の第一線から引退した。その後はカリフォルニアにこもって作曲をしたり、スイスにきて祖国の体制批判家への支援、救済にあたりしていた。

そのクーベリックが去年再びブラハに帰り、自分が生んだ『ブラハの春』の初日にチェコ・フィルの指揮台に立っている。去年はこのほか、ブラハでもう一回指揮台に立った。今回は去年から三度目のブラハでのコンサートとなった。

日本では、既に10月19日にNHK衛星放送で録画中継している。プログラムは前半がモーツァルト2曲、交響曲第38番《ブラハ》K.504とルドルフ・フィルクスニーを独奏者に迎えてピ

アノ協奏曲第25番K.503。後半はドヴォルザークの交響曲第9番《新世界より》というものだった。クーベリックが去年指揮したのはスメタナの交響詩《わが祖国》だけだったはずだから、今回のプログラムはクーベリックのブラハ復帰後二つ目のプログラムになる。モーツァルトのブラハがらみの作品とドヴォルザーク。チェコ・プログラムだった。

開演は夜の8時。すこし早めにでかけて会場のスメタナ・ホール付近にいと、7時15分にクーベリックが指揮棒一本を手に夫人や友人たちと車から降りてきた。すかさずホール入口付近にいた人たちから拍手がわき起こり、クーベリックは何回も立ち止まっては周囲に笑顔で挨拶しながら、ゆっくりとホールの階段を登って楽屋に消えていった。

当日券売場は長蛇の列だったが、どうも並んだ人たちは全員入れたようだ。ホール客席は満席のうえ、立ち聴きの人がとても多かった。

さて、ここからは映像の部分だが、クーベリックがステージに登場すると聴衆全員のスタンディング・オヴェーション。続いてファンファーレ（スメタナ）が鳴らされ、皆が座りかけたところにハーヴェル大統領夫妻の登場。なにか中世に戻って、国王でも現れたかのよう。意図的にやったのなら民主主義国家の新生チェコスロヴァキアには相応しくない。このまま坐っているのか、立っているべきなのか、みんな迷っているようだった。

さてコンサートのほうだが、クーベリックのモーツァルトを聴くのも20年ぶりくらいにな

る。モーツァルトの《ブラハ》は、ホール内部のユーゲント様式（スティル）がかもしだす、ゆるやかにカーヴを描く線や、ふっくらとした面の暖かさとは対照的に、冷たく厳格で、古典的である。フィルクスニーを独奏者に迎えての協奏曲でも、このクーベリックのモーツァルトは変わらない。とはいえ共に『ブラハの春』を創始しながらも社会主義体制に反対してアメリカに渡った旧友をサポートしての音楽は、交響曲に比べるとどこか温かい。二人とも80歳をまもなく迎える年齢にあるが、フィルクスニーの演奏もそんな年齢は感じさせない。厳しい顔つきでピアノに向かっていたフィルクスニーも、弾き終わり緊張の解けたあとの笑顔は青年の顔だ。

クーベリックのドヴォルザークは《新世界》も含め、これまでに何回か聴いているが、以前の演奏と本質的にどこも変わっていない。感傷や甘い叙情とははっきり一線を画し、譜面に書かれた細部の一つ一つを組み立て上げながら、大きな《新世界》を構築していく。基本的には《ブラハ》に対したのと同じ音楽の姿勢であり、つくり上げられた音楽は、まるでゴシック建築のようだ。

それにしても、かつては病氣療養の多かったクーベリック、なんと若々しいことだろう。クーベリックの音楽の魅力は、毎回毎回が新鮮でエネルギーに満ちていること、職人的な手なくれた音楽づくりではない。指揮の技術もとくに優れているとはおもえないが、音楽へのエネルギーが全てを解決している。フルトヴェングラー亡きあとの今世紀の貴重な音楽家だ。

このコンサートからもう19年になる。この間にクーベリックは祖国の自由化を見とけ亡くなった。チェコスロヴァキアはチェコとスロヴァキアに分離独立し、それぞれEUに加盟した。ビザも不要になった。最近では毎年のようにブラハへ出かけるが、町もホールも美しくなり、今日では重要な観光資源になった。この録音・録画が行われたときは、ホールのステージ裏は荒れ果て、ネズミの巣窟のようだった。今日ではそんな面影も消し去られている。この録音は貴重な歴史的遺産になった。(2010年6月)
(編注：フィルクスニーによるモーツァルトのピアノ協奏曲はこのディスクには収録していません。)

解説：藤田由之

モーツァルト：

交響曲第38番 二長調 K.504《ブラハ》

モーツァルト(1756~1791)のいわゆる“後期3大交響曲”よりも約1年半前に書かれたこの二長調の交響曲も、それらに匹敵する音楽的円熟をしめすとともに、きわめて明確な個性をそなえたものとなっている。それは、この作品が書かれた時期が、あの〈フィガロの結婚〉と〈ドン・ジョヴァンニ〉というふたつのすぐれたオペラの間に位置しているということから考えても、当然のことと言えるかもしれない。完成されたのは、1786年12月6日ウィーンにおいてであり、ウィーンでは演奏されることなく、翌年1月19日、ブラハの国立劇場においてモーツァルト自身の指揮によって初演された。〈ブラハ〉の名で呼ばれているのはそのためであるが、それが、当初からブラハで上演するために書

かれたものであるかどうかについては、異論もないではない。しかし、この作品が、ブラハと深いゆかりをもつことになったふたつのオペラと音楽的な関連を思わせていることも含めて、この名称にふさわしいものがあることは事実であろう。この交響曲はまた、しばしば〈メヌエットなし〉の名でも呼ばれることがある。1778年の〈パリ〉交響曲をはじめ、メヌエットをもたない交響曲はいくつかあるが、この作品だけをそう呼ぶのは、1783年の同じ調性による〈ハフナー〉交響曲と対比してのことであるが、ここでモーツァルトがメヌエットを省略したことについていろいろな推測がなされているとしても、この作品が、3楽章だけによってきわめてすぐれた均衡をみせているばかりでなく、実質的に、4楽章からなる〈ハフナー〉よりも大きな規模であることを思わせていることは否めまい。また、この〈ブラハ〉交響曲では、1783年のいわゆる〈リンツ〉交響曲で初めて彼が試みた第1楽章への緩徐な序奏の添加が、さらに充実した構想をもって踏襲されていることも見のがせまい。もちろん、冒頭楽章に緩やかな序奏をおくことは、ハイドンによってすでになされてきたことであり、モーツァルトがそれを自己のスタイルに巧緻に同化させたものであることは言うまでもない。

第1楽章は、アダージョの序奏とアレグロのソナタ形式による主部とからなっているが、両者の関係はきわめて密接なものがあり、その構想は多様な動機を巧妙に扱うことによって、みごとに統一が図られている。第2楽章 アンダン

テもソナタ形式によるものであり、彼の緩徐楽章の中でも最も円熟した書法をみせたもののひとつとなっている。第3楽章 プレストは、ほぼロンド・ソナタ形式と呼ぶにふさわしいような快活な終曲であり、構造上の緊密さは、前2楽章に勝るとも劣らぬようなところがある。また、この交響曲全体を通じて、対位法的な手法への明確な志向と、シンコーションのリズムへの好みが見のがせまい。

ドヴォルザーク：

交響曲第9番 小短調 作品95《新世界より》

1892年9月に、ニューヨークのナショナル音楽院の院長に就任するため渡米したドヴォルザーク(1841~1904)は、そこでの約3年にわたる生活の中で、いくつもの傑作をあいついで生みだしている。その最初の作品が、〈新世界より〉と題されたこの交響曲であり、その後、弦楽四重奏曲〈アメリカ〉や小短調の〈チェロ協奏曲〉、それにヴァイオリンとピアノのための〈ソナチネ〉などが生みだされて、この時期の創作力の充実ぶりと独自の作風とが明らかにされている。このアメリカでの生活は、新しく開かれた土地にみなぎる生命力に接することによって、かえって故国への認識や愛着を強めるようになったが、同時に、ボヘミアの民族音楽とインディアンや黒人たちの音楽との関連を知る機会ともなった。この交響曲についても、ドヴォルザークは、それを“祖国愛が生みだしたチエコ音楽であるが、アメリカでの体験なくしては生み

だし得なかったもの”としている。彼は、そこに、そうした民族的要素を織りこみながら、外形的には、伝統的な4楽章の構成をとり、しかもワグネルリアンあるいはネオ・ロマンティックな手法とも見られた循環形式によって構成上の統一を図った。それは、早くからワグナーを信奉していたドヴォルザークにとっては、きわめて当然のことでもあったろうが、その背景に、当時のニューヨークで重要な存在をなしていたワグネルリアンたちの力が意識されていたことも否めまい。そして、1893年12月16日のアントン・ザイドルの指揮するニューヨーク・フィルによるカーネギー・ホールでの初演は、予期以上の大成功を収めた。なお、この作品を一だんとボピュラーなものとしたラールゴの楽想は、ロングフェローの〈ハイアワサの歌〉を読んで得た靈感にもとづいて書かれたものと言われているが、その主題はまた、弟子のフィッシャーによって歌曲〈帰郷〉に編曲されて広く知られたため、ドヴォルザークがアメリカの歌曲を引用したという誤解も招いた。

第1楽章は、アダージョの序奏と、アレグロ・モルトのソナタ形式による主部とからなるもので、それは、この交響曲全体の基本的な情調をも暗示している。なお、ここでの主部の副次主題が、再現部ですべて提示部より半音高められているのも興味深いといえよう。第2楽章 ラールゴは、転調のための役割も果たすコラールによって導入される大規模な3部形式によっている。第3楽章 モルト・ヴィヴァーチェのスケルツォも、〈ハイアワサの歌〉から靈感を得て書か

れたものと言われており、かなり規模の大きいトリオとコーダとをもっている。第4楽章アレグロ・コン・フォーコは、ソナタ形式にもとづく終曲であると同時に、それまでのすべての楽章に用いられた主題や動機を有機的に扱ったもので、華やかに全曲を結んでゆく。

ラファエル・クーベリックについて

1914年6月29日に、著名なヴァイオリニスト、ヤン・クーベリックを父としてチェコスロヴァキア西部のビホリに生まれた彼は、プラハ音楽院で作曲、指揮とヴァイオリンを学び、1934年チェコ・フィルを指揮してデビューした。1936年から39年までと、1942年から48年まではチェコ・フィルの常任指揮者を、またその中間はブルノ国立オペラ音楽監督をつとめたが、1948年社会主義化に反抗してロンドンに亡命し、以後西側で活躍して1973年にはスイス国籍を取得した。その間、シカゴ交響楽団音楽監督、コヴェント・ガーデン王立歌劇場音楽監督、バイエルン放送交響楽団首席指揮者、メトロポリタン歌劇場音楽監督などを歴任あるいは兼任したが、1978年からフリーとなり、1986年重傷を負って第一線から退いた。1990年民主化後の祖国の〈プラハの春〉に登場して話題を呼び、1991年10月下旬にチェコ・フィルとも来演している。1996年8月11日、スイスのルツェルンで逝去。

(1992年発売のCD：COCO-9728より転載／一部補訂)

“ORT Mastering”とは

日本コロムビア・スタジオ技術部が開発した「倍音再構築技術：ORT」とMaster Sonic 64bit Processing技術による高精細な演奏処理を用いたマスタリング手法です。

日本コロムビアでは1972年に世界初の実用PCM録音機を開発、デジタル録音の先駆者として、数多くの名演奏を録音、高い評価を博しました。これら過去の音源を、現在のハイビット・ハイサンプリング環境で再生するための一手法としてORTが開発されました。

◆“ORT Mastering”では、ORTの技術を駆使するマスタリングエンジニアによって、楽音本来の豊かな音色やなめらかなさ、そしてホールの響きなどが復活、原音に忠実に、名演奏、名録音の魅力をお届け致します。

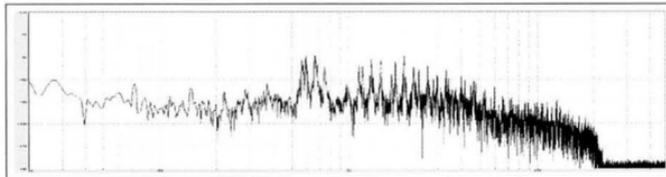
ORT Mastering の特徴

- ◆ マスタリングエンジニアによる繊細な倍音復元。
- ◆ 広いダイナミックレンジと周波数帯域を活かす高品質マスタリング。

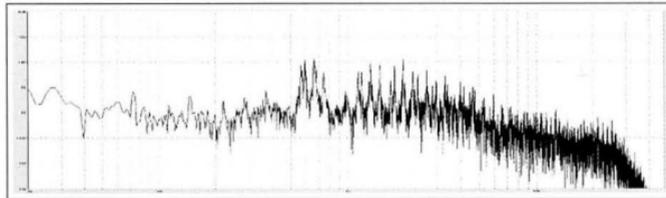
倍音再構築技術：ORT

日本コロムビアで開発した、倍音再構築技術 (Overtone Reconstruction Technology:ORT) のことです。アナログ/デジタル変換時に失われてしまった楽音の高域成分を、低域部分の倍音を利用して予測、再構築します。

オリジナルマスター
音源の
周波数特性



ORT Mastering後の
周波数特性



- 取り扱い上の注意 ● ディスクは両面共に、指紋、汚れ、キズなどをつけないよう取り扱いください。● ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内面から外面に向かって放射状に軽くふき取ってください。レコード・フリーナーや溶剤などは使用しないでください。● ディスクは両面共に、鉛筆、ボールペン、油性ペンなどで文字や絵を書いたり、シールなどを貼付しないでください。● ひび割れや変形、又は接着剤などで補修したディスクは危険ですから絶対に使用しないでください。
- 保管上の注意 ● 直射日光の当たる所、高温・多湿な場所での使用・保管は避けてください。● ご使用後、ディスクは必ずプレーヤーから取り出し、専用ケースに入れて保管してください。● ケースの上に乗った重い物を置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。